日本人の「内なる神」

森　謙二

昭和三十年代のはじめ、私が小学低学年の頃である。明治生れの祖父が、毎朝東の空に昇った太陽に向かって柏手を打ってゐた。いたづらをすると祖父に「お天道様に恥づかしくないのか?」とよく叱られてゐたので、この太陽こそが「お天道様」であると思った。

◇　◇

この記憶はしばらく忘却の彼方にあったが、それが甦ったのは、奈良県の大和高原の都祁（現・奈良市）で調査をおこなったときである。この地域では、中世に遡る「宮座」組織の伝統が続いてゐた。調査の目的は宮座の組織であったが、村人たちの祈りの対象である宮座の「神」に私は関心を持った。

村人たちの祭りや儀礼を通じておこなはれる感謝と祈願は、稲作栽培を踏まへた「五穀豊穣」と新たに村人となる「子供の誕生」に対してである。宮座の神は姿こそ見せないが、すべての座衆によって崇められてゐた。この宮座の神は豊かさをもたらす「二種類の生産」（ものの生産と人間の出産）を司り、普遍的で不可欠な存在として祈りの対象になってゐるやうに思へた。

柳田國男はこの「神」を祖霊に集約していったが、経済史学者の住谷一彦先生は、この宮座の神を、ウィーン大学の民族学者W・シュミットやW・コッパースの議論を踏まへた上で、「高神」（hoch Gotte〈ホッホゴット〉）と呼んだ。姿こそ見せないが、空高く民を見守る「神」である。住谷先生は、この「神」の前でこれまで陰日向なく勤勉に働いてきた日本人こそが戦後の経済成長を支へてきたのだ、と語ってゐた。来訪神ではなく、高神様のなかに私たちの日本人の「内なる神」を見出したのである。

こもれび

◇　◇

それからしばらくして、沖縄に行く機会があった。そして、宮古島の来間といふ小さな島で当時九十二歳になってゐた一人のオバーに出会った。ノロ（女性の司祭者）だったオバーは来間に伝はる神歌を歌ひながら、来間の「神」について教へてくれた。実に、来間の神々は三十六人を超えた。その頂点に立つのが太陽神であるティンガナスである。ティンガナスは、来間の創造神であるンマティダとは別の神であるとされたが、ともに太陽神だといふ。オバーが来間の東の御嶽に籠もってゐると、ティンガナスの足音が聞こえてくるといふ。オバーは、ティンガナスが顔を見せることはないが、村人のことをいつも守ってゐる守護神である、といふ。従って、来間の人々はこのティンガナスの前では決して悪いことはしないと。来間で起こる悪事はいつも来間の外からやってくるのだといふ。

◇　◇

来間の神々はギリシャ神話の神々のやうに体系化されてゐないが、人格化されてゐる。いはば、高神様が人格化したものがティンガナスである。そして、来間の人々はこの「神」を守護神として生きてゐるのである。

日本の「神」をアニミズムと結びつけて理解し、あるひは祖霊神に集約をする傾向がある。このやうな方法もそれなりに有効な分析方法であるが、日本人のなかにある「内なる神」がどのやうに発展し、どのやうに伝承されてきたか、もう少し考へても良ささうである。

もり・けんじ＝茨城キリスト教大学名誉教授